

パワーエレクトロニクス標準化委員会/TC22 国内委員会を振り返って

パワーエレクトロニクス標準化委員会/TC22 国内委員会 幹事
古関 庄一郎 (日立製作所)

変換装置標準特別委員会 (現パワーエレクトロニクス標準化委員会)/TC22 (SC22B, SC22G) 国内委員会 (現 TC22 国内委員会) と関わりをもったのは、1990 年、池田委員長・今井幹事から深尾委員長・地福幹事への交替時、比嘉幹事補佐の後任として幹事補佐に就任したときからである。地福幹事の後任の関幹事に代わって 1997 年からは幹事を務めて 10 年目になる。

この間、13 件の JEC 規格の制改訂に携わり、さらに 2 件を制定中で、また 1 件の改訂に着手したところである。当委員会の活動は、JEC 規格の件数・新しさという点は誇れると思う。これは、パワーエレクトロニクスの進歩の速さによるものと思うが、発破を掛けてくださった委員長ほかの関係者、およびこのようなことを許容してくれた会社にも感謝しなければならない。

IEC 100 周年ということで、ここでは IEC 会合に関する思い出を述べることにする。

幹事になって 10 年目になるが、IEC TC22 の会合に出席したのは最近の 2 回しかない。会合に縁をもったのは幹事補佐時代、1995 年 Durban (South Africa) での会合に同席するように関幹事から依頼されたのが最初である。その後、1998 年 Rosslyn (USA) では SC22F NC 委員長の小林氏、1999 年 Oslo (Norway) では、SC22G NC の本田氏に出席いただいた。出席してどうなるかと言われることを考えると、なかなか出席できなかった。

1998 年には、WG1 (用語) の委員になっていた。思い切って WG 会合に参加を申し出たが、不可であった。このときはファクシミリでコメントを提出した。完成した IEC 60050-551-20 の CD をみると、提出したコメントが反映されたように思った。FDIS 可決後、コメントを提出して用語を 1 つ変更してもらった。可決後の修正ということで手続き上おかしいかもしれないが、一つの成果と思っている。

1999 年は、京都総会に併催される可能性があった。総会の計画があった時点で TC22 会合実施を申し込んだが、IEC 本部から TC22 は開かないとの連絡があり取り下げた。その後、TC22 から開催要請があったが、その時点では追加できなかった。別会場で独自に開催することもできず、TC22 で各国に問合せた結果、Oslo で開催された。日本で開けなかったことが残念である。なお、SC47E (個別半導体) は京都で開催され、これにリエゾンとして TC22 chairman の Lips 氏 (ドイツ) が参加したので、小職も参加した。会議後、加茂川のほとりでデバイス関係者と懇談したことがなつかしい。

2001 年 Helsinki (Finland) 会合には何としても出席しようとした。ところが例の 9/11 同時多発テロが起きて緊急外の海外出張はできなくなってしまった。このときは、電子メールという手段が備わったので、議題に対してコメントした。Lips 氏がこれを議題に取り上げ、一部採用された。かえって成果があった。

2003 年 Montreal (Canada) 会合で初めて出席した。IEEE の大会とちょうどスケジュールが続いた松瀬委員長にも参加いただいた。先生の口を通して関係者といろいろ話し合えた。また、この会合は総会と一緒にあり、最後に全体での懇親会が開かれた。松瀬先生の指導で、高柳会長(当時)の席にも近い、よい場所に参加でき、ラッキーであった。

この会合では、SC22H (無停電電源システム) 設置後日本から誰も出席していなかったので、SC22H の会合にも参加した。Secretary の Beaudet 氏 (フランス) が気さくな人で、日本からの寄与を求められた。会議中、ガス漏れによる避難騒ぎがあった。隣のビルをさまよっているとメンバーから声を掛けられ、休憩所のテーブルで会議が続けられた。これも今となってはよい思い出である。

2005年 Rosslyn (USA) 会合では、SC22Hに参加した森氏とともに参加した。SPS (活動方針文書) の修正にコメントを反映できた。このときは、改正作業が進められている IEC 60146-1-1 に対するコメントを MT 委員である西鳥羽氏の意見も伺って用意していたので、MT の Convenor でもある Sanhet 氏 (フランス) から会議後に打合せを求められた。1 対 1 の会話となったため、こちらの意見をよく聞いていただけた。会議の席ではなかなか発言がむずかしいが、WG / MT レベルでは意見を反映しやすいことがよく分かった。その後、メールにてさらに追加コメントを提出した。

誰もが言うように WG に参加することが国内意見を反映する最良の手段ということがよく分かった。現在は電子メールという手段で、たとえ WG に参加できなくても議論ができるようになっている。これを活用しない手はないと思う。しかし、そうはいつでも直接話し合う効果は重大である。それがあったからこそ、相手もよくメールを読んでくれる。

振り返ってみると京都総会で TC22 会合を開けなかったときあたりから日本のパワーエレクトロニクス技術が低下し始めたように思う。「日本は、パワーエレクトロニクスの先進国であるから、日本で開催させてほしい」という TC22 からの要請を受けられなかった。世界一のパワーエレクトロニクスに向けて挽回するためのきっかけとして、是非日本での会合を開催したいと思う。

なお、拙文をまとめるにあたって昔の資料を調べたところ、1997年1月16日、Geneva に TC22, SC22B/E/F/G の Chairman, Secretary のほか、CO, TC9, TC96 の代表も集まって TC22 の再構築の議論をしており、これが現在の TC22 の枠組みに至っている。小職がちょうど幹事になった年である。